

浮舟最終詠「尼衣かはれる身にやありし世の…」考

——浮舟物語における手習歌の存在意義——

岡 陽 子

はじめに

『源氏物語』最後の女主人公・浮舟は、「手習の君」という呼称を併せ持つ（九条本古系図等）ことから明らかなように、その人物造型を考えていくにあたって詠歌を外すことはできない。特に、手習巻を中心とした彼女の手習歌の多さには目を見張るものがあり、歌と散文との距離の問題を中心に、これまでにも多くの論が展開されてきた。

ところが、浮舟の詠歌は手習巻を最後とし、物語最終巻の夢浮橋巻では一首も詠まれない。つまり、浮舟という人物を特徴づけるものである和歌を欠いた状態で残りの浮舟物語および『源氏物語』は進められ、結末をむかえるのである。物語にとつて浮舟の最終詠は一つの大きな転換点であるといえよう。しかし、この浮舟最後の手習歌、

尼衣かはれる身にやありし世のかたみに袖をかけてしのばん

（手習⑥三六一）
に關しては、藤井貞和氏の論に詳しいように反語・疑問両説が存在し、「首尾さだかでない」難解な歌とされてきた。次に挙げるように、近年刊行された『新日本古典文学大系』（平五〇九 岩波書店）および『新編日本古典文学全集』（小学館）においても、いまだ解釈が分かれて

○『新日本古典文学大系』——反語

尼衣の姿に変わり果てたわが身にはいまさら昔の形見としてこの華やかな衣裳をまどつて昔を偲んだりしようか。墨染を非難する声に反発。（脚注）

○『新編日本古典文学全集』——疑問

尼衣の姿に変わり果てたこの身に、このはなやかな袖をうちかけて在俗のころの昔をしのぶことにしようか（現代語訳）

高田祐彦氏、吉野瑞恵氏もそれぞれ手習歌について綿密な論を展開されているが、いずれも最後の歌については言及されておらず、山田利博氏も「二応反語説を採っておく」という立場で論じられているに過ぎない。

このように、浮舟最後の手習歌は、浮舟物語および『源氏物語』全体の方向性を見定める上でもかなり重要なものでありながら、いまだ解決されていない問題を残しているのである。本稿では、この歌が表す心情を明らかにした上で、前後の散文との関わりから浮舟物語の方向性を追求していきたい。

一 問題点その一・係助詞「や」

前述の通り、この歌で最も問題となるのが第二句の「や」という助詞である。この語の解釈しだいでこの歌は疑問・反語いずれともとれる。そこで、『源氏物語』作中和歌における係助詞「や」の用法を確認することによって、この歌をとらえなおしたい。以下、この歌と同じように係助詞「や」を持ち、詠作者本人を主体とする動詞に付く助動詞「む」で結ぶものを掲出すると、全十七例見られ、それらは「む」の用法から大きく二つに分類できる（用例には巻名・『新編国歌大観』歌番号・作中詠者名を付記する）。

○「む」が意志を示す場合

- ① なほざりに頼めおくめる一ことをつきせぬ音にや_レかけてしのば_レん（明石・二三五・明石の君）
- ② 見るめこそうらふりぬらめ年へにし伊勢をの海人の名をや沈めむ（絵合・二八〇・藤壺中宮）
- ③ つららとち駒ふみしだく山川をしるべしがてらまづやわたらむ（椎本・六四七・薫）
- ④ 今朝のまの色にやめでんおく露の消えぬにかかる花と見る見る（宿木・七〇一・薫）

浮舟最終詠と同じく「む」が自らの意志を示す場合はわずかに四首であるが、①の明石の君の詠歌場面を例として見てみる。

この御心にだに、はじめてあはれになつかしう、まだ耳馴れたまはぬ手など心やましきほどに弾きさしつづ、飽かず思さるるにも、月ごろ、など強ひても聞きならさざりつらむと悔しう思さる。心の限り行く先の契りをのみしたまふ。「琴はまた掻き合はするまでの形見に」とのたまふ。女、

なほざりに頼めおくめる一ことをつきせぬ音にやかけてしのば_レん

言ふともなき口ずさびを恨みたまひて、

「逢ふまでのかたみに契る中の緒のしらべはことに変らざりなむ

この音違はぬさきかならずあひ見む」と頼めたまふめり。されど、ただ別れむほどのわりなさを思ひむせたるもいとことわりなり。（明石②二六六）

傍線部のように、源氏の将来を約束する言葉に対し、かりそめな言葉とわかつていてもその一言を「しのばん」と歌うのである。この歌における「や」はあくまで軽い疑問であり、明石の君の真情は「これから暮つていきましよう」というところにある。以下、その他の例を見ても、③「私がまず渡りましようか」、④「束の間の今朝の（朝顔の）美しさをめでましようか」の意となり、②の藤壺詠が「伊勢の海人の名声を沈めてよいものでしょうか。（よくはありません）」の意で反語となることを除いて全て「私（詠作者）がこれから、ししようか」という軽い疑問を表す、「ししよ」という意志の表明に

重点の置かれた歌となっている。

○「む」が推量を示す場合

⑤月のすむ雲居をかけてしたふともこのよのやみになほやまどは

む(賢木・一六〇・光源氏)

⑥唐国に名を残しける人よりも行く方しられぬ家ゐをやせむ(須

磨・一八七・光源氏)

⑦あかなくに雁の常世を立ち別れ花のみやこに道やまどはむ(須

磨・二二三・頭中将)

⑧もろともに都は出てきこのたひやひとり野中の道にまどはん

(松風・二八四・明石の尼君)

⑨なき人をしたふ心にまかせてもかけ見ぬみつゝの瀬にやまどはむ

(朝顔・三三二・光源氏)

⑩年を経ている心のたがひなばかがみの神をつらしとや見む

(玉鬘・三四一・玉鬘の乳母)

⑪今日さへやひく人もなき水隠れに生ふるあやめのねのみなかれ

ん(螢・三七四・螢宮)

⑫鶯の声にやいとどあくがれん心しめつる花のあたりに(梅枝・

四三〇・螢宮)

⑬なかなかに折りやまどはむ藤の花たそかれどきのたどたどしく

は(藤裏葉・四四〇・夕霧)

⑭いまはとて燃えむ煙もむすほはれ絶えぬ思ひのなほや残らむ

(柏木・五〇一・柏木)

⑮今はとてあらしやはてん亡き人の心とどめし春の垣根を

(幻・五六八・光源氏)

⑯花を見て春は暮らしつ今日よりやしげきなげきのしたにまどは

む(竹河・六一一・藏人少将)

⑰生ける世の死は心にまかせねば聞かはやまむ君がひとこと

(竹河・六一四・藏人少将)

明らかに詠歌主体の意志を表す浮舟最終詠歌とは異なるが、「む」が推量を表す場合も、⑤の源氏詠を例として参考のために見ておきたい。

誰も誰も、あるかぎり心をさまらぬほどなれば、思ふことどももえうち出でたまはず。

「月のすむ雲居をかけてしたふともこのよの闇になほやまどはむ」

と思ひたまへらるこそ、かひなく。思し立たせたまへるうらやましきは限りなう」とばかり聞こえたまひて、人々近うさぶらへば、さまざま乱るる心の中をだに、え聞こえあらはしたまはず、いぶせし。(賢木②一三三)

出家直後の藤壺を訪ねた源氏が、自らの想いを歌に託して伝える場面である。「月のすむ雲居」すなわち出家したあなた(藤壺)を慕って出家をめざすとしても、自分はやはりこの世の闇(子ゆえの心の闇)に「まどはむ」、迷うことであろうか、の意であると解釈される。

さらにそれに続く十二例も、⑥「これからさき行方も知れぬ旅住まいをするのであろうか」、⑦「花の都に帰る道にも迷うことでしょうか」、⑧「一人野中の道に迷うことでしょうか」、⑨「三途の川瀬で遠方にくれることでしょうか」、⑩「鏡の神を恨めしく思うことでしょうか」、⑪「声をあげて泣くことでしょうか」、⑫「私の心はいよいよよいものか、かえって迷うことでしょうか」、⑬「藤の花を手折ってよいものか、かえって迷うことでしょうか」、⑭「私のあなたへの思いの火はやはりこの世に」残ることでしょうか」、⑮「荒れ果てさせてしまふのでしょうか」、⑯「今日からは、繁る木陰で深い嘆きにまどうことでしょうか」、⑰「あなたの一言を聞かずじまいになるのでしょうか」と解釈できる。このように、「係助詞「や」を推量の「む」が結ぶ場合は、いずれも「私（詠作者）はこれからすることだろうか」という軽い疑問の形であり、主眼は「することだろう」という予測にある歌ばかりであることがわかる。

すなわち、『源氏物語』作中和歌を見る限り、詠作者本人を主体とする動詞に付く助動詞「む」を結びとして持つ場合、「係助詞「や」は軽い疑問と解釈でき、「反語とは考えがたいのである。浮舟最終詠もまた「私はこれから偲んでいこうか」と思いきれない浮舟の心のたゆたいを表現したものと解釈する方が自然であるといえよう。

二 問題点その二・「かたみに」

次に問題としたいのが第四句の「かたみに」という語である。この

点に關しても、從來「互いに」という意味を兼ね備えるかとされながらも、解釈上は「形見に」という表面の意味のみが採用されてきた。

この語についても『源氏物語』作中和歌の用例を見ると、次の二例が挙げられる。

⑰ 逢ふまでのかたみに契る中の緒のしらべはことに変らざらなむ
（明石・二二六・光源氏）

⑱ かたみにぞかふべかりける逢ふことの日数へだてん中のころも
を（明石・二四〇・光源氏）

⑰は先に挙げた明石巻の場面であり、琴の緒を「形見」として「互いに」再会を約束する、という歌となっている。もう一例の⑱の詠まれた場面を以下に引用する。

入道、今日の御設け、いとかめしう仕うまつれり。人々、下の品まで、旅の装束めづらしきさまなり。いつの間にかしあへけむと見えたり。御よそひは言ふべくもあらず、御衣櫃あまた荷さぶらはす。まことの都の苞にしつべき御贈物ども、ゆゑづきて、思ひよらぬ隔なし。今日奉るべき狩の御装束に、

寄る波にたちかさねたる旅衣しほどけしとや人のいとむとあるを御覧じつけて、騒がしけれど、

かたみにぞかふべかりける逢ふことの日数へだてん中の衣を

とて、「心ざしあるを」とて、奉りかふ。御身に馴れたるどもを遣はず。げにいまひとへ忍ばれたまふべきことを添ふる形見な

めり。(明石②二六八)

この歌も源氏が明石を去るにあたって明石の君に向かつて詠んだ歌であり、衣を「形見」として「互いに」取り替えるべきだ、と言っている。用例数が少ないため、「やくむ」の場合ほど確実には言えないが、二例ともに「形見」と「互み」の掛詞となっている点は注意すべきではないだろうか。

これらを浮舟最終詠に還元すると、「かたみに」は、過去の「形見に」という意味はもちろんながら、その裏には「互みに」すなわち同じ衣を介して薫と浮舟がお互いに、という思いが込められている、という可能性が高いといえるのではないだろうか。

三 浮舟の意識と無意識

以上、他の『源氏物語』作中和歌から帰納してこの歌の問題点について考えてきた。これらをふまえると、この歌の解釈は次のようになる。

尼衣の姿に変わり果てた我が身に、この(華やかな)袖をうちかけて(お互いに)——薫がこの衣を見て私を偲ぶように私も——

在俗のころの昔を偲んでいくことにしようか。

すなわち、この一首を単独で取り出すと、浮舟の心は在俗の頃(直接的には薫その人)を偲んでいる、と解釈できるのである。

だが、これまでも多く言われてきたように、物語作中和歌を文脈から切り離して単独で取り出すことはあまり有効ではなく、あく

まで場面に即して解釈すべきであると考えられるため、次にはこの歌を物語本文に戻し、前後の文脈と併せて考えてみたい。該当場面を引用する。

忘れたまはぬにこそはとあはれと思ふにも、いとど母君の御心の中推しはからるれど、なかなか言ふかひなきさまを見え聞こえたてまつらむは、なほ、いとつつましくぞありける。かの人言ひつけしことなど、染めいそくを見るにつけても、あやしうめづらかなる心地すれど、かけても言ひ出でられず。裁ち縫ひなどするを、「これ御覧じ入れよ。ものをいとうつくしうひねらせたまへば」とて、小桂の単衣奉るを、うたておぼゆれば、心地あしとて手も触れず臥したまへり。尼君、急ぐことをうち棄てて、「いかが思さるる」など思ひ乱れたまふ。紅に桜の織物の袿重ねて、「御前には、かかるをこそ奉らすべけれ。あさましき墨染なりや」と言ふ人あり。

尼衣かはれる身にやありし世のかたみに袖をかけてしのばん

と書きて、いとほしく、亡くもなりなん後に、ものの隠れなき世なりければ、聞きあはせなどして、疎ましきまで隠しけるとや思はん、などさまさま思ひつつ、「過ぎにし方のことは、絶えて忘れはべりにしを、かやうなることを思しいそぐにつけてこそ、ほのかにあはれなれ」とおぼどかにかのたまふ。

薫がいまだ浮舟のことを忘れてはおらず、その一周忌のための衣を依頼してきたことを知った浮舟は、薫に対し、傍線部 a「あはれ」と感じる。しかし、それにつけてもより強く思いをさせるのは「母君の御心」であり、あくまで薫への思いは封じられたかのようにである。さらに傍線部 bにあるように、「うたて」また「心地あし」という感情から、その衣に手を触れることはできない。また、この歌の直後には傍線部 cのように妹尼に思いをさせ、これまでずっと拒み続けていた過去に関する語りを、小野に来て以来初めて自ら進んで口にしていく。が、ここで浮舟が思いやるのは妹尼であり、薫ではない。薫への想いはわずかに「ほのかにあはれなれ」と語られる程度なのである。もとより匂宮への想いはこの場面には全く見受けられない。

このような歌の前後に見られる浮舟の心情および言動と関わらせて読むと、確かにこの場面で詠まれた歌は、「ありし世」の形見である衣には手を触れはしない、という過去に対する拒否の心情を表すものとして、すなわち「や」を反語として解釈すべき歌であるように思われる。しかし、先に述べた通り、『源氏物語』作中和歌の用法から帰納して、この歌そのものはあくまで過去および薫を偲ぶものと読めるのである。

となると、この一首に見られる正反対の解釈、矛盾こそが、大きな問題を内在しているのではないだろうか。つまり、浮舟の意識としてはあくまで「過去を拒絶し、小野で生きていく」という決意を詠

んだつもりなのであるが、実はその歌は「過去および薫をこれから慕つていこう」という想いが表明されたものでしかなかった。この浮舟自身の意識と、歌に実際に表れた感情——浮舟の無意識——との断層こそが重要であると思われるのである。

このような浮舟の意識と無意識について、手習歌が果たす役割は、早くに後藤祥子氏が「散文が語り尽くせない部分、というよりも語つてはならない部分を、歌が、一種虚構の姿勢を許されることによつて、おのずから露呈する」と論じられ、吉野瑞恵氏もまた、「手習歌は物語の新たな展開を促すために存在しているのではなく、散文では明らかにされない浮舟の内面、むしろ浮舟自身の意識の下にあるものを示すために存在している」と説かれて¹⁾いる。このように、前後の散文で描かれるのは浮舟自身が気づく範囲の意識であり、歌はいわば浮舟の無意識の領域を表す、という図式がそのまま、この浮舟最終詠にも当てはまると考えられるのである。

四 手習歌の役割

ただし、これ以前の手習歌の場合と決定的に違うのは、歌に表れた無意識に浮舟自身が全く気づいていないという点である。以下、主な場面を先行の論に導かれつつ、今一度確認してみたい。

I 尼君ぞ、月など明き夜は、琴など弾きたまふ。少将の尼君など
いふ人は、琵琶弾きなどしつづ遊ぶ。「かかかるわざはしたまふ

や。つれづれなるに」など言ふ。昔も、あやしかりける身に、

心のどかにさやうのことすべきほどなかりしかば、いささをか
しきさまならずも生ひ出でにけるかなと、かくさだすぎに
ける人の心をやるめるをりにつけては思ひ出づ。なほあさ
ましくものはかなかりけると、我ながら口惜しければ、手習に、
身を投げし涙の川のはやき瀬をしがらみかけて誰かとどめ

し

思ひの外に心憂ければ、行く末もうしろめたく、疎ましきまで
思ひやらる。
(手習⑥三〇二)

II はかなくて世にふる川のうき瀬にはたづねもゆかじ二本の
杉

と手習にまじりたるを、尼君見つけて、「二本は、またもあひ
きこえんと思ひたまふ人あるべし」と、戯れ言を言ひあてたる
に、胸つぶれて面赤めたまへるも、いと愛敬づきうつくしげな
り。
(手習⑥三二四)

III 思ふことを人に言ひつづけん言の葉は、もとよりだにはかばか
しからぬ身を、まいてなつかしうことわるべき人さへなければ、
ただ祝に向かひて、思ひあまるをりは、手習のみたけきこと
にて書きつけたまふ。

「亡きものに身をも人をも思ひつつ棄ててし世をぞさらに棄
てつる

今は、かくて、限りつるぞかし」と書きても、なほ、みづから

いとあはれと見たまふ。

限りぞと思ひなりにし世の中をかへすがへすもそむきぬる
かな

同じ筋のことを、とかく書きすさびるたまへるに、中將の御
文あり。
(手習⑥三〇四〇)

I は小野に移つて初めての浮舟詠である。尼君達の音楽を契機と
して詠み、ものに書き付けたその歌を自ら眺めた浮舟は、そこに詠
まれた想いが「思ひの外に心憂いものであることに気づく。続くII
は浮舟詠に関して頻繁に取り上げられる場面であるが、妹尼の初瀬
参りへの同行を断つた浮舟は、「たづねもゆかじ」と、過去の二人す
なわち薫と匂宮とを拒否した歌を詠んだつもりであった。にも関わ
らず手習として書写されたそれを見つけた尼君によつていとも簡単
に、「またもあひきこえんと思ひたまふ人あるべし」と、実は二人を
いまだに想っていることに浮舟自身、気づかされてしまう。さらに
III は出家翌朝の感懐を手習として複数書き付ける場面である。出家
によつて俗世間を、過去を、すっかり断ち切つたのだ、という想
いを詠んだのではあるが、書き付けられたそれを見ると「なほ、みづ
からいとあはれ」なものであることに気づくのである。

IV 年も返りぬ。春のしるしも見えず、凍りわたれる水の音せぬさ
へ心細くて、「君にぞまどふ」とのたまひし人は、心憂しと思ひ

はてにたれど、なほそのをりなどのことは忘れず、

かきくらす野山の雪をながめてもふりにしことぞ今日も悲しき

など、例の、慰めの手習を、行ひの隙にはしたまふ。我世になくて年隔たりぬるを、思ひ出づる人もあらむかしなど、思ひ出づる時も多かり。
(手習⑥三五四)

この場面Ⅳは出家後、新年を迎えて詠まれたもので、同じ手習とはいえこれまでの歌とは趣を異にする。小野の春の景色は「凍りわたれる水の音」すなわち宇治へと浮舟の想いを導く。小野に移って以来初めて、「悲し」という過去への直接的な想いを詠み、過去の人々を思うのである。

非常に大まかにはあるが、主な手習歌を場面に即して見てくると、これまでの浮舟は手習という形をとるにより自らの無意識の領域に気づくあるいは気づかされてきたといえる。

ここで改めて最終詠に戻ってみると、浮舟にとつて無意識に存するもの——過去および薫を偲ぶ気持ち——は、「書きて」眼前にあるからには、そのことに浮舟自身が気づく可能性は十分にあつたといえよう。しかし、この場面での浮舟は先に確認したように、この歌を見てもなお、薫に想いをはせることなく過ごしたのである。

おわりに

自分自身に己れの無意識の感情を伝える、それが浮舟の手習歌の役割であつた。単なる独詠歌の場合とは異なり、手習、すなわち書くことによつてその歌を客観的に目にし、そこに表れた無意識に気づく、そこに浮舟物語における手習歌の存在意義があつた。しかし、その思いを他者に気づかされることも、まして自ら気づくこともできなくなり、あくまで意識のレベルでしか判断も行動もできなくなつた時、浮舟にとつて手習歌はその存在の意味すらなくしてしまつたのではないだろうか。機能を失つた手習歌はもはや物語には取り込まれない。「手習の君」浮舟はこの「三尼衣」の歌を最後に手習をやめざるをえなくなり、夢浮橋巻ではとうとう一首も詠まれないまま、物語は閉じられたのである。

〔注〕

(1) 「手習歌」については、単なる独詠歌とは異なり「前後の地の文に『手習』と明記されるか、或いはそれに準ずるものとして何かに書きつけられたことが明白である独詠歌」である、との定義が、山田利博氏(「イ」)「源氏物語における手習歌——その方法的深化について——」(『中古文学』第三十七号(昭61)・6)、「ロ」)「手習巻の浮舟の手習歌——歌と散文との距離——」(『源氏物語と平安文学』第一集(昭63) 早稲田大学出

版部)に示されており、それに従う。

- (2) 浮舟の和歌に関して論じられてきたものとしては、主に、藤井貞和氏「物語における和歌——『源氏物語』浮舟の作歌をめぐり——」(『国語と国文学』昭58・5)、後藤祥子氏「手習いの歌」(『巖源氏物語の世界』第九集(昭59 有斐閣))、高田祐彦氏「浮舟物語と和歌」(『国語と国文学』昭61・4)、吉野瑞恵氏「浮舟と手習——存在とことば——」(『むらさき』昭62・7)、前掲注(1)山田利博氏論文「口」などがあり、これら一連の研究史をまとめた上で現在なお残る浮舟論の課題を、小町谷照彦氏「手習の君浮舟」(『源氏物語作中人物論集』(平5 勉誠社))が提示しておられる。

- (3) 以下、『源氏物語』本文の引用は「新編日本古典文学全集」『源氏物語』①～⑥(阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳(平6～10 小学館))により、巻数(丸数字)と頁数を付記した。傍線は全て私に付した。

- (4) 藤井貞和氏前掲注(2)論文。

- (5) 「新日本古典文学大系」『源氏物語』一～五(柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注(平5～9 岩波書店))。

- (6) 高田祐彦氏、前掲注(2)論文。

- (7) 吉野瑞恵氏、前掲注(2)論文。

- (8) 山田利博氏、前掲注(1)「口」論文。

- (9) 後藤祥子氏、前掲注(2)論文。

- (10) 吉野瑞恵氏、前掲注(2)論文。

- (11) なお、山田利博氏は前掲注(1)「口」論文において、「浮舟が何らかの精神的危機に陥ったことを示すシグナルとなっており、周囲の散文が実状況をも含めた浮舟の真情を明かし、それを抑圧するためあるべき姿を虚構し自己に必死に伝達するという体裁で詠み出されるのが手習歌なのであつて、この二つは相呼応して浮舟の心理を生々しく表現する方法となりおせている」と論じておられる。

——おか・ようこ、広島大学大学院博士課程前期在学——